

Fortune



「だから、俺はこんなのは嫌だったんだ！」

「そんなこと言っても、仕方ないでしょう？」

「俺の身長や体重を全世界で使うなんて、どうかしてる！」

「否定はしないけど・・・これも仕事のうち・・・よ？」

「気楽に言ってくれるよ・・・」

「変わるのなら変わってあげたいですわ」

「・・・いや、そういう意味じゃない、悪かったな、シェリア」

・ 321 年 建設中の帝都宮殿 皇帝が私室に一人



「そろそろ、私も眠るときが来たようだ。

考えてみれば、色々な事のあった人生だったな・・・。

シェリア・・・そこにいるのか？

今まで引き止めて悪かったな・・・。

縁があれば・・・また会える・・・。

シュミ・・・また背中に乗せてくれ・・・。

俺は風を切って飛ぶ方が、まだ・・・

・・・性に合うと言っただろう？

第一・・・まだ終わって・・・ない・・・。」

真祖、最後の御言葉の意味が分かるのは、遙か先のこと。

しかし、そのとき、この言葉を覚えている者は皆無に近い。

・ 328 年 アウザ湖を眺めながら、かつての勇者は語る



「フィリップ！どこだ？」

「馬鹿な！誰が火を放ったのだ？」

深夜に及んだ戦いの混乱が、何かを狂わせたのか？

「・・・オールドル・・・ディンガー・・・

私は・・・ここは？・・・！・・・何ということだ・・・」

激しい炎に阻まれ、仲の良かった3家の長子たちが
揃うことはもう叶わない・・・。

「もう皆に合わせる顔が無いな・・・
このままリグナーデの所まで・・・
・・・エミリア・・・」

このときミシリング家は断絶することとなった。

・338年 炎に包まれたミシリング家の館



「ヨブ・・・お前に頼みがある」
「何なりと・・・陛下・・・」
「ふふ・・・この期に及んで、そんな口調はよしてくれ・・・」
「こちらにも体面というものがあるのだが・・・」

「"塔"に預けたもの・・・あれのことだ・・・」
「中は開けていないぞ？」
「・・・それでいい・・・だが、最初の書簡はお前宛てだ」
「そこに書いてある通りにすればいいんだな？」
「話が早くて助かる・・・お前の孫・・・いや、ひ孫ぐらいに・・・なるとは思うのだが・・・」

「例え私の子孫でなくとも"塔"が責任を持つと誓おう」
「充分だ・・・」

・355年 アールハス公、親友を看取る



「・・・ワ・・・ワタ・・・シ・・・ハ・・・ダレ・・・？」

それは50年前、魔族に踊らされて引き起こされた悲劇の犠牲者。
その魂は新たな生を拒み、この地に残っていた・・・。

「アあ・・・やハリ・・・ゆメではない！」

次第に形を取り戻す魂・・・いや、もうそれは魔・・・なのか？

「あの方を奪った罪、必ず償わせる！」

はっきりとした怨嗟の念・・・それだけが『それ』を動かす。
瓦礫すら分からない荒地に、禍々しい気配を帯びたものが集まる。

・ 388 年 かつてミシリング家の館があった地で



「あなたは、こちらに残るのね？」

「ああ。それが約束だからな」

「正直なことを言うと、私も迷ってるの・・・」

「あんまり利口な方法ではないな。・・・だが、鍵を2つに分ければ、

それだけ封印も守りやすいさ。俺達に分かっていればいい」

「そう・・・そうよね・・・」

「何代もかけて謝り続ける・・・そうするしかないだろうな。

今のままでは、魔族に蹂躪されるままだったんだ・・・」

「ええ。でも、エラゾソのこと、本当に注意して」

「ヘカリスも分かっているさ。一番、損な役回りだな」

「・・・彼によろしくね。じゃあ、行くわ」

この年、エーリアは正統ゼール王国を発足させることになる。

・ 413 年 シリアム・ゼリナート城門 しばしの別れ



「リュシル様・・・その赤子は・・・人間では？」

「ええ、そうなの。さっきから泣き声が聞こえてて・・・」

「黒い瞳・・・中央の血・・・ですかね」

「このまま、放っておいたら可哀想よね」

彼女は その赤子に心当たりがあった

何十年前前、もしもの時はよろしく頼む、と言った男がいたのだ

どうやら、その「もしもの時」が来たようなのだが、

素直に言うことを聞くべきかどうか、珍しく迷った

その時、赤子が自分に微笑みかけた・・・ような気がした

「うふふ、育て方・・・次第よね・・・」

周りのエルフ達がいぶかしげにしている中、楽しげにするリュシルだった

・ 415 年 銀輪の森にて



「・・・あとはマリユ・・・お前に任せたぞ」

「父上、気弱なことを仰いますな・・・」

「自分のことだ。分かるとも。・・・そろそろ眠くなってきたな」

もどかしげに口にすると、ヘカリスは目を静かに閉じた

「ゼール・・・やはり リグナーデの導きが必要不可欠だな・・・
せめてエーリアだけでも、あいつと一緒にしてやってほしいんだが・・・」

"生ける盾"を構成していたメンバーは皆先に旅立っている
自分が一番最後・・・一人見送るたびに増す寂寥感と戦うのも、これで終わり・・・

すすり泣く声の中、静かに彼もリグナーデに抱かれたのだった

・442年 息を潜める王城の中で



大きな衝撃と共に"槍"が、彼女の持っていた鎌を砕く
そのまま彼女の胸に深々と"槍"は突き刺さる・・・

「・・・ジ・・・ジーナス・・・」
「俺が分かるか？」
「・・・ええ・・・ありがと・・・う・・・」
「礼には及ばん」
「・・・ごめ・・・んなさ・・・い・・・」
「謝罪も不要だ」
「でも・・・もう・・・あなたとは・・・」
「お前一人だけにはさせんさ。
それならリグナーデも分かってくれる」
「・・・ああ！」
「いずれ、どこかで会った時は、約束・・・守れよ・・・」
「・・・は・・・い・・・」

転生し受け継がれていく魂・・・それは希望をつなぐ鎖・・・

・480年 閃光の中で・・・



「やはり双子が我が国に与えた影響を考えますと・・・」
「だがだからといって、どちらかを捨てる・・・という訳にはいかん。
オッフレングがそうするように、我等も抗するまでだ」
「・・・確かに・・・。
ですが、民に広まる不安だけは何とかするべきかと・・・」

過去、公国に双子が生まれたときに起きた事件は、枚挙に暇がない。
そして残念ながら、それに例外はないことが、すぐに分かる・・・。

・ 481 年 ディス公国内に噂が絶えない



「ビステムの兵が城内にも侵入したようです」

「街は大丈夫・・・だろうか？」

「昨年来、近隣に避難した者が多い・・・はずです。

ですが、我々の前途も決して平坦ではありません・・・」

「その通りだな・・・」

その腕の中で、赤子がすやすやと眠っていた。

しかし、その安らかな眠りに何か邪魔が入ったらしい。

赤子は、目を開けて大きな声で泣き始めた。

「！ ああ、ユリエル様・・・

お願いですから お泣きにならないで下さい。

奴らに見つかって・・・！」

赤子が怯えるのも無理はない。

彼らの眼前には、ここにはいるはずの無い姿があったのだ。

明らかにそれは魔族と呼ばれる高位の存在のはずだった・・・。

・ 481 年 深夜のディス公居城地下を歩く人影



旅人・・・というには軽装だった

客人・・・という先触れも無かった

「おい！ そこのお前！ ここに何のようだ？」

訝しげに詰問する衛兵

そちらに虚ろな目を向けた彼女を見た時、衛兵がはっとする

「・・・どこかで見た顔・・・！！・・・エーリア様？」

既に記憶だけとはいえ、

城に飾られた初代女王の肖像画を見た事の無い者はいない

「・・・ゼールが・・・ここに来たって・・・」

生まれも育ちも分からない、この謎の女性が 次の女王になる

ということ、この衛兵が想像できなかったとしても、誰も責められまい

・ 492 年 シリアム・ゼルス of 城門 思いもよらない客人



「ギルスはこの辺に詳しいのか？」

「・・・詳しいというほどではないな」

もうひとり、若い女性がその後ろを懸命についていく

「きゃっ」

「!・・・なんだマリエル、脅かすなよ。

魔物でも来たのかと思ったぞ？」

「足元、気をつけてな。結構崩れやすいぞ」

「ご、ごめんなさい・・・。

ちょっとよそ見をしちゃったみたい・・・」

だが男2人は、彼女の様子が少しおかしいことに気づいていた。
扉の入り口に刻まれた紋章を見つめたときの彼女の表情は
とても平静のものとは思えなかったのだ。

・499年 かつてのディス公国離宮にて



「今度の皇帝陛下は、妙なことばかりするなあ」

「ああ。ヴェゼリアがあるっていうのに、

なんだって今更街道を作るのかねえ」

「俺らにはさっぱりわからんなあ」

そのころ帝都には秘密裏に召喚された者がいた

「黒影が車ウォンデル様が御到着です」

「うん、これで全員揃ったな」

「陛下、矢と車を呼ぶとは、どのような御意志でしょうか？」

「これから説明するよ。

聞きたいことは山程あるだろうが、それからでいいかな？」

「は、勿論でございます」

即位したとはいえ、まだ17歳・・・皇帝より若い黒影衆はいない
それでも槍に認められた皇帝である以上、その意志は絶対だ

・502年 密かに帝国は動き始める



「・・・『国王』より伝令でございます。

『時は来た。封印はやがて解ける。

コルフティカの封印守護の任を解く。全軍 王都へ進発せよ』

この命に従い、現在王都に向かい移動中でございます。

まずはアフィシヤス帥爵との合流後、指示をお待ちします」

疲労の極限に達しつつ、伝令は一気に言伝を奏上した。
謁見の間でアナティ 1 世は思案顔になるが、すぐに決断する。

「ゴージェット統爵を呼べ。リサァンテとマナテルムにも伝令。
いつでも出撃できるように準備を整えさせろ。
・・・あとは南にも使いをやりたいのだが・・・」
「私が参りましょう」

アナティ 1 世が右腕と頼むイフィリスが進み出る。
うなづく国王。

「うむ。これは我が国だけの問題ではない。必ず伝えてくれ」
「はっ」

・ 503 年 昼夜を問わず駆けてきた伝令を前に